



# 健やかな日々と新たな命を願って ～百々地区諏訪神社の祇園祭～



「オイントロサッセー」神輿を担ぐ人々の威勢のいい掛け声が、春風にのって満開の桜を揺らめかせます。4月第二日曜日に行なわれる百々地区諏訪神社の祇園祭の風景です。

祇園祭といえは京都の夏を彩る伝統的な祭りです。元は、旧暦6月に行なわれた疫病を鎮めるための祭りで、平安時代に始まり、千年以上の伝統をもちます。この信仰が姿形を変えながら各地へ広まり、遅くとも江戸時代には全国的に祭りが行なわれるようになりました。現代のような医学がまだ発達していない時代の人々にとって、疫病の流行は非常に恐ろしいものでした。そこで疫病をつかさどる牛頭天王(ごうとうてんわう)を祭って、疫病を免れようとしたのです。諏訪神社の祇園祭がいつ始まったのかは定かではありませんが、幕末の嘉永6年(一八五三)に書かれた「百々村祇園祭礼任儀帳」によれば、その2年前に神輿が壊れたため新しく作りなおし、古くからの慣例どおり6月に諏訪神社から若宮社まで神輿の御幸※1を行なうと記されています。

大正時代、養蚕の繁忙期と重なるため祭日が4月に移されましたが、御幸の伝統は今にも受け継がれています。春とはいえまだ肌寒い朝、神社でまず神事が執り行なわれます。そして、祭神の建御名方神を神輿に移すと、いよいよ御幸が始まります。氏子が集まり、大きな掛け声とともに450kgもの神輿が動き出しました。神輿は、百々の宮内から北新居までを順に練り歩きます。さらに、村へ入る途に防犯のために四方を清めるべく、村境の東西南北にまで赴くのが特徴です。※2



昭和18年祇園祭  
チウウマタギが見える

「善し上げ」が行なわれます。さらさらかな春の陽光に照らされ、神輿はまるで青空に舞い上がるかのようです。次に、五穀豊穡の祝詞が捧げられます。こうした神事は各御旅所<sup>（ごりょじょ）</sup>でその都度行なわれます。新町の神明社ではその昔、疫病退散の祝詞が奏上されました。また、百々村の北側には明治時代まで御勅使川が流れていたため、北の境では洪水除けの神事が行なわれていました。神輿頂上に鎮座する鳳凰の足には、麻ひもが結わえられ、神輿に合わせてこなやかに揺れ動きます。麻ひもは昔へその緒をしほることに使われたことから安産のお守りとされるようになり、御幸後、氏子が繞ってこの麻ひもを持ち帰り、また、諏訪神社の祇園祭は、子宝や安産を願う祭りでもあったのです。陸傍の山の神などの様には、まっ赤な人形の「さるぼろ」も見られます。これは安産や子どもの成長を願うお守りです。



吹き流しとさるぼろ

祭りが終わり、肩に手を当てる氏子の後ろ姿が夕暮れに重なりました。神輿の重さは、病や災いを避け、新たな命の誕生を願う、その重さなのかもしれません。今年もまた、「オイントロサッセー」の掛け声が、私たちの背がやちてきます。文／写真 文化財課・個人

今年の百々祇園祭は、4月7日(日)に行なわれます。

※1 神様が神輿などに乗って移動すること  
※2 東境は東新居の若宮社まで  
※3 祭神が巡幸するとき、仮に神輿を鎮座しておく場所